

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第44集

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成19年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

町谷4遺跡（平19地点）

当郷本郷遺跡（平19地点）

咄戸沼遺跡（平19A地点）

子ノ神1遺跡（平19地点）

大道北遺跡（平19地点）

咄戸沼遺跡（平19B地点）

小林遺跡（平19地点）

台遺跡（平19地点）

間堀1遺跡（平19地点）

2007

館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第44集

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成19年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

町谷 4 遺跡 (平19地点)

当郷本郷遺跡 (平19地点)

咄戸沼遺跡 (平19 A 地点)

子ノ神 1 遺跡 (平19地点)

大道北遺跡 (平19地点)

咄戸沼遺跡 (平19 B 地点)

小林遺跡 (平19地点)

台遺跡 (平19地点)

間堀 1 遺跡 (平19地点)

2007

館林市教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成19年度に国宝重要文化財等保存整備事業費補助金、群馬県文化財保存事業費補助金を受けて実施した館林市内遺跡発掘調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき次のとおりである。地点名は、平成19年度の調査であることから、「平成19年度地点」とする。

町谷4遺跡	当郷本郷遺跡	畠戸沼遺跡	子ノ神1遺跡
大道北遺跡	小林遺跡	台遺跡	間堀1遺跡

なお、畠戸沼遺跡については、今年度2箇所調査を行ったため、「平成19年度地点A」(平19 A地点)と「平成19年度地点B」(平19 B地点)に区別する。

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体者	館林市教育委員会
担当課	文化振興課文化財係
調査組織	教育長　　大塚 文男（平成19年4月まで） 橋本 文夫（平成19年6月より） 教育次長　　齊藤 良雄 文化振興課長　早川 紀正 文化財係長　岡星 英治 主査（学芸員）　阿部 弥生 主査（学芸員）　原 幸恵 主査　　荒川 博一 主事（学芸員）　吉田 紋乃 主事（学芸員）　吉村 昭和 調査作業員

4. 調査作業員は、館林市教育委員会で雇用した。

5. 出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。

6. 本書の編集・執筆については、荒川、吉村が中心となり行った。

7. 調査の実施および本書刊行にあたり、下記の諸氏諸機関のご協力を頂いた。ここに記して感謝申しあげる次第である。(順不同)

館林市都市建設部道路河川課　　地権者各位

凡 例

1. 本書における挿図の縮尺は、図中に記した。
2. 遺跡位置図は、館林市都市計画図 ($S = 1/10000$) を $1/5000$ に拡大し用いた。なお遺跡位置図中のスクリーントーン  は遺跡地、 は調査地を示している。
3. トレンチ図は、館林市道路台帳 ($S = 1/1000$) を用いた。
なおトレンチ図中のスクリーントーン  は遺構を示している。
4. 写真図版で▲印を付した写真是、紙面の都合により写真左を上、写真右を下に配置した。

目 次

例 言.....	1
凡 例.....	2
目 次.....	3
挿図目次.....	4
写真図版目次.....	5
 第1章 館林の環境.....	6
1. 地理的環境.....	6
2. 歴史的環境.....	6
 第2章 調査概要.....	9
1. 町谷4遺跡.....	9
2. 当郷本郷遺跡.....	11
3. 嘑戸沼遺跡（平19A地点）.....	13
4. 子ノ神1遺跡.....	15
5. 大道北遺跡.....	17
6. 嘑戸沼遺跡（平19B地点）.....	19
7. 小林遺跡.....	21
8. 台遺跡.....	23
9. 間堀1遺跡.....	25
 参考文献.....	28
写真図版.....	29
報告書抄録.....	35

挿図目次

第1図 館林市の位置	6
第2図 館林市の地形概念図	8
第3図 平成19年度調査遺跡の位置	8
第4図 町谷4遺跡	9
第5図 トレンチ配置図	10
第6図 当郷本郷遺跡	11
第7図 トレンチ配置図	12
第8図 岩戸沼遺跡（平19A地点）	13
第9図 トレンチ配置図	14
第10図 子ノ神1遺跡	15
第11図 トレンチ配置図	16
第12図 大道北遺跡	17
第13図 トレンチ配置図	18
第14図 岩戸沼遺跡（平19B地点）	19
第15図 トレンチ配置図	20
第16図 小林遺跡	21
第17図 トレンチ配置図	22
第18図 出土遺物実測図	22
第19図 台遺跡	23
第20図 トレンチ配置図	24
第21図 間堀1遺跡	25
第22図 トレンチ配置図	27
第23図 出土遺物実測図	27

写真図版目次

写真図版 1	29	写真図版 4	32
1-1 町谷 4 遺跡	重機掘削	7-1 小林遺跡	調査地
1-2	調査風景	7-2	1 レンチ遺構確認
1-3	3 レンチ完掘	7-3	2 レンチ遺構確認
1-4	3 T サブレンチ	7-4	3 レンチ遺構確認
2-1 当郷本郷遺跡	調査地	7-5	3 T 遺物出土状況
2-2	1 レンチ確認状況	7-6	出土遺物
2-3	2 レンチ確認状況	8-1 台遺跡	調査地
2-4	埋め戻し	8-2	2 レンチ完掘
写真図版 2	30	写真図版 5	33
3-1 嘴戸沼遺跡 (A) 調査地		8-3 台遺跡	3 レンチ完掘
3-2	1 レンチ完掘	8-4	2 T 井戸址完掘
3-3	2 レンチ完掘	9-1 間堀 1 遺跡	調査地
3-4	1 T 石臼出土状況	9-2	1 号住居址
4-1 子ノ神 1 遺跡	調査地	9-3	2 号住居址
4-2	調査風景	9-4	3 号住居址
4-3	1 レンチ完掘	9-5	4 ST 遺物出土状況
4-4	2 レンチ完掘	9-6	出土遺物
写真図版 3	31		
5-1 大道北遺跡	調査地		
5-2	1 T 遺構確認		
5-3	2 T 遺構確認		
5-4	2 T 土坑完掘		
6-1 嘴戸沼遺跡 (B) 調査地			
6-2	1 レンチ確認		
6-3	2 レンチ確認		
6-4	2 T 遺構完掘		

第1章 館林市の環境

1. 地理的環境



第1図 館林市の位置

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約8万人の都市である。市域は東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に長く、総面積は約60km²である。北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町に、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町に接する。明和町の南には利根川が東流し、群馬県・埼玉県の県境となっている。県庁所在地の前橋市までは約50km、東京（台東区浅草）へは約65kmの距離にあり、首都圏との結びつきも強い。群馬県東南部は、「邑楽・館林」地域と呼ばれ、群馬県の中では低地に位置している。

館林市の標高は、15m台（大島町東部）から33m台（高根町）であり、おおむね平坦であるといえる。本市の地形を概観すると、「低台地」と「低地帯」に分けることができる。市域中央部に「低台地」が東西に延びるように所在し、その周辺に「低地帯」が広がる。

この「低台地」は、「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地であり、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、台地の北側に沿って大泉町古海から本市高根に至る、日本最古の砂丘の一つである埋没河畔砂丘が走っており、本市最高標高点はこの上にある。

「低地帯」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された沖積低地である。台地北側の低地帯には、旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は、沖積低地から延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東西流する鶴生田川および城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地を開析する谷には、他にも茂林寺沼、蛇沼、近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市景観の特徴のひとつになっている。

2. 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は、145ヶ所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）には、そのうちの144ヶ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡3遺跡、縄文時代の遺跡13遺跡（縄文土器のみ採取できた遺跡）、弥生時代の遺跡は0（弥生時代の遺物を採取できた遺跡2遺跡）、古墳時代～平安時代の遺跡（土師器の出土した遺跡）96遺跡（うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は23遺跡）、古墳は17遺跡（古墳總數25基）、中世生産址1遺跡、中世城館址12遺跡、近世城館址2遺跡である。（ただし、複合した時代の遺物散布地が見られるため、その中心になると考え

られる時代でまとめたものである。)

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっていることが観察される。館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりを概略してみると、次のような。

〈旧石器時代〉

この時代の遺跡は、市内の標高の高い地域に集中する傾向を見せる。邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元で呼ばれる内陸河畔砂丘（自然堤防）上に、その多くが確認されている。

〈縄文時代〉

この時代になると、遺跡数が増えるとともに洪積台地上に営まれるようになる。前期や中期の遺跡は、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に確認されることが多い。後期以降は遺跡数は減少し、その所在は、台地の斜面から微高地に移る傾向がある。後・晚期の包含層等は低地（沖積地）によよぶ。

〈弥生時代〉

弥生時代の遺跡として確認されたものはないが、微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されている。

〈古墳時代〉

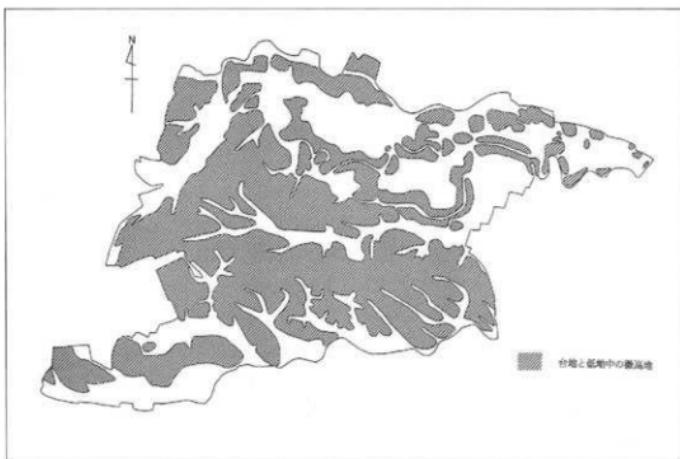
前期の遺跡は少ない。遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在することが多く、この傾向は、弥生時代の遺物の散布状況に似ている。中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。後期には、遺跡数は増大し、台地上の平坦部に所在する場合が多い。墳墓としての古墳は、25基が残存している。古墳群が2ヶ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする内陸河畔砂丘上にある。その他単独のものも多いが、そのいずれもが、谷や谷地等をみおろす洪積台地上に所在している。

〈奈良・平安時代〉

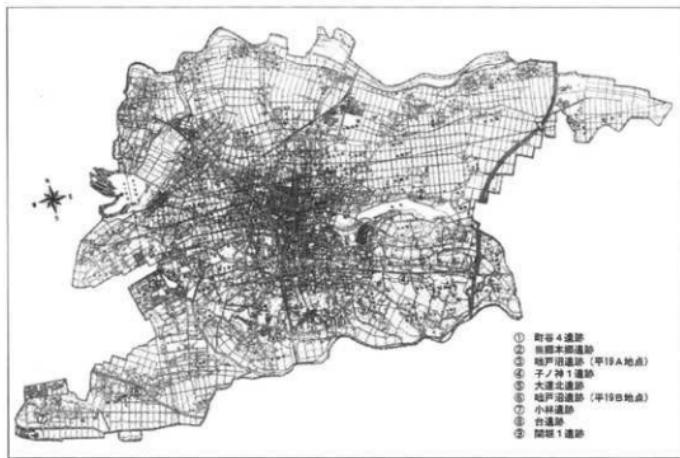
この時代の遺跡は急増する。台地の内部や全面で遺物の採取ができることから、この時代以降は台地上に普遍的に集落等が営まれてきたことを示唆している。

〈中世・近世〉

この時代の城館址については、伝説的な要素が多く実体ははっきりしないが、中世末には館林城が築かれ、現在の館林市の基礎となつた。



第2図 館林市の地形概念図



第3図 平成19年度調査遺跡の位置

第2章 調査の概要

1. 町谷4遺跡



第4図 町谷4遺跡（1:5000）

所 在 地

館林市羽附町字町谷548-4

調査原因 露天資材置場造成

調査期間

平成19年4月13日～4月24日

調査面積 742m²

遺跡周辺の環境

町谷4遺跡は、東北自動車道館林インターチェンジの北方約600mに位置し、平安時代の遺物を散布する遺跡である。

館林台地の南東部分は、現在の板倉町南部から延びる谷田川の細長い支谷が台地に深く入り込み、その地形は手のひらを広げたような概観を呈している。

町谷4遺跡は、谷田川から北西方向に延びる三本の谷のうち、最も北の谷を南に望む洪積台地の中腹に位置し、谷に沿って東西に広がっている。今回の調査地は遺跡の東部分にあたる。

周辺の遺跡では、南方に縄文時代や弥生時代の集落跡である道溝遺跡、西方の支谷に沿って志柄1遺跡や志柄2遺跡といった平安時代の遺物を散布する遺跡が広がっている。北方には古墳時代の町谷2遺跡や町谷2号墳が存在する。遺跡の西には東北自動車道が南北に走っているが、周辺は未だ田園風景を多く残す地域となっている。

本遺跡の調査はこれまでに例がない。

調査の概要

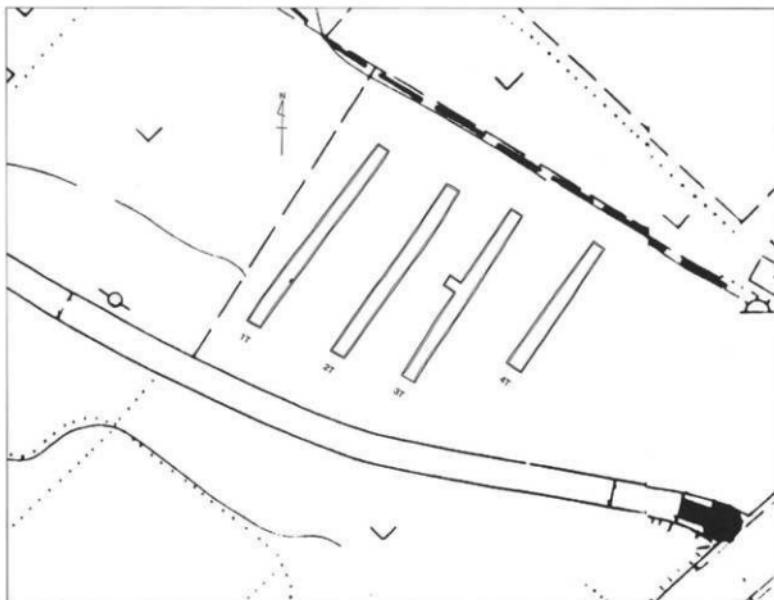
町谷4遺跡(平19地点)の試掘・確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南西から北東方向に4本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

調査区域において現地表面からローム層までの深度は、1トレンチ20~90cm、3トレンチで50~80cmで、南へ大きく傾斜していた。また、各トレンチの南側で湧水が見られた。

遺構としては、1トレンチの南側で時代不明の土坑が一基確認された。また、3トレンチの北側で東西に広がる黒色土が見られたため、トレンチの拡張とサブトレンチを設定し精査したところ、中部ローム層最上部に広がる「暗色帶」がトレンチの床面に露出したものであることが判明した。

遺物は、各トレンチ南側から縄文土器片が少量出土したのみであった。

今回の調査では、保存の対象となる遺構等の確認はできなかったことから、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第5図 トレンチ配置図 (1:400)

2. 当郷本郷遺跡



第6図 当郷本郷遺跡（1：5000）

所在地

館林市当郷町字本郷172-1、171-2、171

調査原因

宅地造成

調査期間

平成19年5月16日～5月28日

調査面積 1,526m²

遺跡周辺の環境

当郷本郷遺跡は、館林市東部で東西の帯状に延びる城沼の周辺に分布する遺跡の一つで、遺跡地はこの城沼の北岸にあり、南に城沼、北側には渡良瀬川の氾濫原である広大な沖積低地が広がり、南北を低地に挟まれた洪積台地上に位置している。この台地は東西に細長く延び、その中央を台地に沿って県道板倉・柳谷・館林線が走っている。

当遺跡は、「館林市の遺跡」には平安時代の埋蔵文化財包蔵地として登載され、周辺には、東に古墳時代から平安時代の当郷遺跡、北方に平安時代の当郷新田遺跡、西には山王山古墳を含む善長寺付近遺跡、更に西に古墳時代の住居址の確認された尾曳町1遺跡、同じく古墳時代の尾曳町2遺跡など、この城沼北岸には前述の帯状に延びる洪積台地上に古墳・平安時代を中心とした遺跡が分布している。

この付近は、県道に沿って住宅が建立しているが大きな開発ではなく、北側の沖積低地には広大な水田が広がり、静かな農村地域となっている。

今回の調査地は、遺跡の東側にあたる。

調査の概要

当郷本郷遺跡（平19地点）の試掘・確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南西方向から北東方向に2本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

調査区域において現地表面からローム層までの深度は40～80cmであった。

今回調査を行ったトレンチ内は、ほぼ全面にわたって擾乱されており、遺構の有無を確認することはできなかった。地権者の話では、現地は過去に雑木林だったが、伐採を行い更地にしたとのことで、擾乱はその時の伐根の影響によるものと推測される。

遺物は、近世以降のものと思われるかわらけなどの土師器片や陶磁器片が多く出土した。

今回の調査において、保存の対象となる遺構等の確認はできなかつたことから、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第7図 トレンチ配置図 (1:400)

3. 噴戸沼遺跡（平19 A 地点）



第8図 噴戸沼遺跡（1:5000）

所在地

館林市堀工町字噴戸沼687-7、687-9

調査原因 個人住宅建設工事

調査期間

平成19年9月21日～9月28日

調査面積 266.09m²

遺跡周辺の環境

噴戸沼遺跡は、館林市の南部、東武鉄道伊勢崎線「茂林寺前」駅の東方約900mに位置する縄文時代の遺跡である。

地形を見てみると、邑楽・館林台地の南部で、西に茂林寺沼、東に蛇沼を見下ろす低台地上の中央部に位置している。また南方では、茂林寺川や谷田川が東流している。

本遺跡の周辺には、同じ台地上で、西方の茂林寺沼方面に下堀工道溝遺跡（古墳・奈良時代）、東方の蛇沼方面に大原道東遺跡（縄文時代）、神明前遺跡（縄文・古墳・奈良時代）などが分布している。

既往調査で遺構の確認はされていないが、縄文土器等の遺物は多く出土している。

調査の概要

竜戸沼遺跡（平19A地点）の試掘・確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南北方向に2本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

調査区域における現地表面からローム層までの深度は、1トレンチで20～70cm、2トレンチで50～70cmであった。地形は南に向かって傾斜している。

遺構は、両トレンチから多くの時代不明の土坑が確認された。特に1トレンチ南側ではローム面からの深度が80cmを超える土坑が数基あった。

遺物としては、1トレンチ南側土坑より近世のものと思われる五輪塔の一部と石臼片が出土したほか、両トレンチより中～近世の土器や陶磁器片が数多く出土した。

今回の調査では、保存の対象となる遺構等の確認はできなかったことから、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第9図 トレンチ配置図 (1 : 400)

4. 子ノ神 1 遺跡



第10図 子ノ神 1 遺跡 (1 : 5000)

所在 地

館林市赤生田町字子神2336-4

調査原因 個人住宅建設工事

調査期間

平成19年9月28日～10月4日

調査面積 495m²

遺跡周辺の環境

子ノ神 1 遺跡は、東北自動車道館林インターチェンジの西方約 2 km、館林市街地の南方の田園地帯に位置する平安時代の遺物の散布が見られる遺跡である。

邑楽・館林台地の南辺は侵食が進んでおり、台地の南側を東流する谷田川からの細長い支谷が深く台地に入り込んでおり、その地形の概観はちょうど手のひらを広げたような状況を示す。

子ノ神 1 遺跡は、谷田川から北西方向へ延びるこうした細長い谷頭を南に望む洪積台地のやや張り出した部分に所在し、細長い谷に面して北西に長く広がっている。今回の調査地はその南東部分にあたる。

周辺の遺跡としては、同じ台地上の南方に山東遺跡、西方の支谷に沿って志柄 1 遺跡や赤生田中島遺跡といった平安時代の遺物を散布する遺跡が、本遺跡同様細長く広がる様子を呈して所在する。また、北東には子ノ神古墳（推定）が所在する。遺跡周辺には田園風景が多く残るが、近年国道に沿って開発が進んできている。

本遺跡の調査は、平成18年度に続き 2 例目である。

調査の概要

子ノ神1遺跡（平19地点）の試掘・確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南北方向に2本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

現地表面からローム層までの深度は、1トレンチで15～30cm、2トレンチで20～25cmであった。調査地はほぼ平坦な地形をしている。

トレンチ床面を精査した結果、両方のトレンチにローム土を切る複数の掘り込みが見られたため埋土の除去を行ったが、形が不定形であることに加え、浅い位置からの湧水により、その性質を明らかにすることはできなかった。

遺物としては、土器片や陶磁器片が少量出土した程度であった。

今回の調査において、保存の対象となる遺構等の確認はできなかったことから、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第11図 トレンチ配置図 (1 : 400)

5. 大道北遺跡



第12図 大道北遺跡（1：5000）

所在地

館林市岡野町字大道北446-1

調査原因 個人住宅建設工事

調査期間

平成19年10月9日～10月18日

調査面積 357.61m²

遺跡周辺の環境

大道北遺跡は、東武鉄道佐野線「渡瀬」駅の西方約1.2km、県道足利・館林線の東側に位置する。「館林市の遺跡」作成に伴う市内遺跡詳細分布調査において、遺物の散布状況と付近の地形から、古墳時代～平安時代の遺跡とされた。

地形的には邑楽・館林台地の北縁にあたり、北と東は渡良瀬川の氾濫原である沖積低地に面し、西には邑楽・館林台地を開析し高根幹線排水路を谷底とする谷が南北に走っている。遺跡は、北に延びる舌状台地の付け根部分に広がり、標高は約26mである。

周辺の遺跡では、南東に50mほどの所に縄文時代と古墳時代～平安時代の遺物を散布する岡野・屋敷前・岡遺跡が広がっている。また、南西には奈良時代～平安時代の遺跡である新倉前遺跡がある。さらに谷を隔てて北西には、縄文時代と古墳時代～平安時代の遺跡である高根・外和田遺跡が広がっている。

本遺跡において散布する遺物は、西側の低地に沿うように広がっている。平成6年度に2地点の調査を行ったが特筆される遺構は見つかっていない。しかし、平成8年度の調査地からは古墳時代の住居址が1軒見つかっている。

今回の調査地は、古墳時代住居址が出土した地点の北西で、遺跡の中央付近にあたる。

調査の概要

大道北遺跡（平19地点）の試掘・確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、東西方向に2本のトレンチを設定し、土木重機により表上排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

調査区域において現地表面からローム層までの深度は1トレンチで約40~60cm、2トレンチで70~80cmであった。

今回の調査で、1トレンチ東端から1ヵ所、2トレンチ東側から4ヵ所のローム土を切る掘り込みが見られたため覆土の除去を行った。出土遺物から近世のものと思われるが、不定形であることに加え規則性も見られないことから、その性質を明らかにすることはできなかった。

遺物は、土師器片や陶磁器片、石器が少量出土した。

今回の調査において、保存の対象となる遺構等の確認はできなかったことから、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第13図 トレンチ配置図 (1 : 400)

6. 噴戸沼遺跡（平19B地点）



第14図 噴戸沼遺跡（1：5000）

所在地

鈴木市堀工町字噴戸沼687-1、687-4

調査原因 個人住宅建設工事

調査期間

平成19年11月7日～11月13日

調査面積 275.53m²

調査の概要

噴戸沼遺跡（平19B地点）の試掘・確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南北方向に2本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

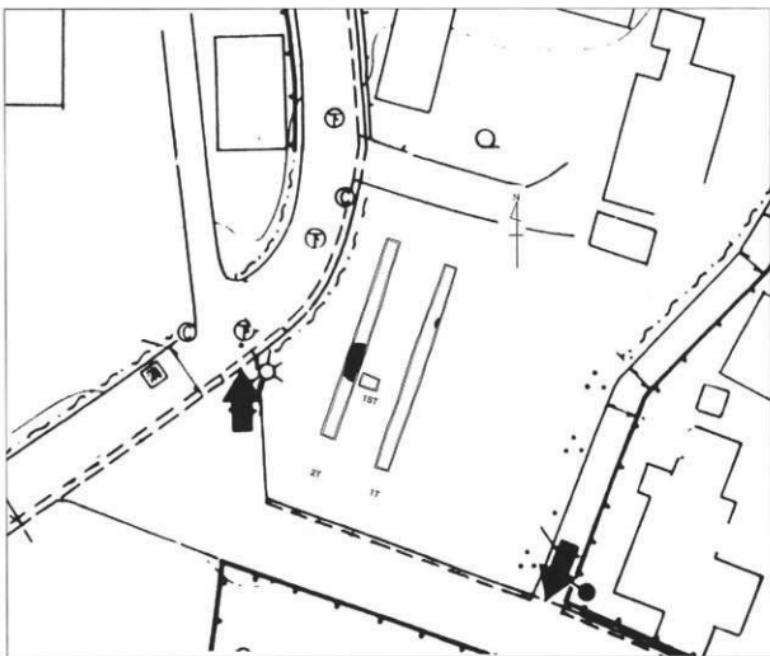
今回の調査地は、9月に実施した地点の西隣にあたる。

調査区域における現地表面からローム層までの深度は約50～70cm。地形は南に向かってゆるやかに傾斜している。

遺構は、1トレンチ北側で井戸が1基、南側で溝状の掘り込みが1条出土した。2トレンチでは、中央部分で東西に延びる幅約3mの掘り込みが見られたため覆土を除去したところ、多量の土師器片が出土した。遺構の状況を調べるために東側にサブトレンチを設定し人力で掘り下げたが、人為的な掘削痕は見られず、住居址等に関わるものでないという判断に至った。

遺物は、2トレンチの1号土坑と1サブトレンチで土師器片が集中して出土した。

今回の調査では、保存の対象となる遺構等の確認はできなかったことから、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第15図 トレンチ配置図 (1 : 400)

7. 小林遺跡



第16図 小林遺跡（1：5000）

所在地

館林市野辺町字長良林1243-2、字申子
985-1、1011-2、1011-3、1011-4、1011-5

調査原因

道路拡幅工事

調査期間

平成20年1月7日～1月8日

調査面積 384.91m²

遺跡周辺の環境

小林遺跡は、館林市南西部を東西に走る県道熊谷・館林線と、その南方を東へ流れる新谷田川の間にあり、邑楽・館林台地の南に沿って流れるこの川に面すように位置し、台地の南縁上に広がっている。この遺跡の南には、利根川に沿って東西に沖積低地が延び、一帯は利根川の氾濫原となっている。

本遺跡は、「館林市の遺跡」には古墳時代から平安時代の遺物散布の見られる埋蔵文化財包蔵地として登載され、周辺には西に平安時代の申子遺跡、東には同じく平安時代の東山遺跡や新田西遺跡がある。

現在この付近には目立った開発ではなく、静かな農村風景となっているが、本市の南西に接する邑楽郡千代田町の昭和工業団地を南に遠望できる位置にあり、主要地方道足利・邑楽・行田線や前述の県道熊谷・館林線など交通には恵まれており、将来的に開発の見込まれる地域である。

今回の調査地は、遺跡の南西端部分にあたる。

調査の概要

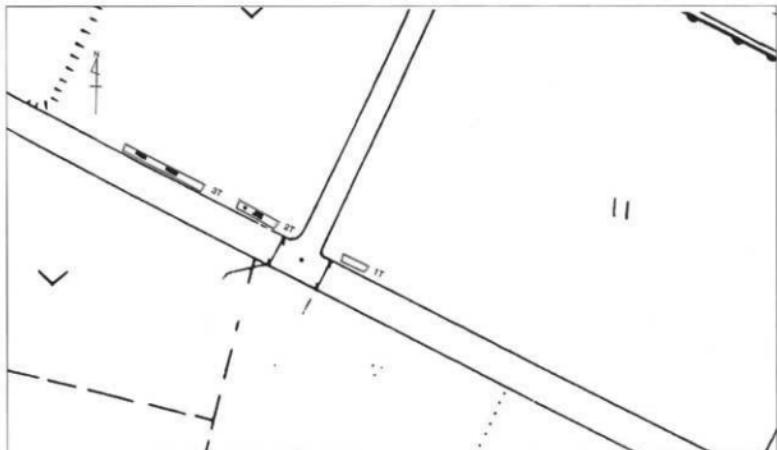
小林遺跡（平19地点）の試掘・確認調査は、道路拡幅予定区域の地形に合わせ、東西方向に3本のトレンチを設定し、人力により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

現地表面からローム層までの深度は1～2トレンチで約60cm、3トレンチで約40～50cmであった。調査地の高低差はほとんどない。

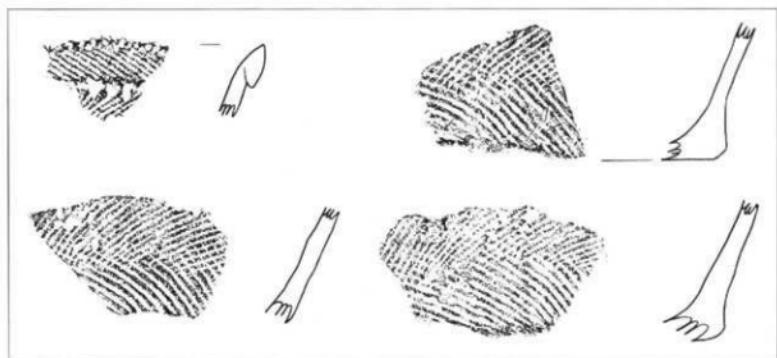
今回の調査で、1トレンチは表土以下で大きな擾乱を受けており、土中にビニールシートやガラス片が混在していた。2トレンチと3トレンチでは、ローム面を切る円形の掘り込みが計4ヶ所確認されたため覆土の除去を行ったところ、3トレンチ3号土坑から弥生時代の土器片が出土したが、他の土坑から遺物の出土はなく、深度が非常に浅いこともあり遺構の性質を特定することはできなかった。

遺物は、3トレンチ3号土坑より弥生時代後期に比定される土器片が3点、表土中より1点出土したほか、土師器片や陶磁器片が出土した。

今回の調査において弥生時代の土坑が1基確認されたが、調査範囲が狭小な道路拡幅部分のみということもあり、遺構の位置づけを明らかにするまでは至らなかった。今後周辺の調査が実施された際に再度検討したい。



第17図 トレンチ配置図 (1 : 400)



第18図 出土遺物実測図 (1 : 2)

8. 台遺跡



第19図 台遺跡 (1 : 5000)

所在 地

館林市上三林町字台515-1、516-1、520-1
の一部

調査原因 店舗建設工事

調査期間

平成20年1月20日～2月15日

調査面積 1,462m²

遺跡周辺の環境

台遺跡は、東武鉄道伊勢崎線「茂林寺前」駅より西へ約4km、館林市の南西端に位置する。遺跡中央を県道熊谷・館林線が東西に走り、南には新谷田川が東流している。

本遺跡は、館林台地に明和町方面から北西へ逆コの字型に入り込む大きな谷の微高地である。南側は利根川に沿って沖積低地が広がり、この一帯は利根川の氾濫原となっている。

「館林市の遺跡」では、本遺跡は平安時代の遺物を散布する埋蔵文化財包蔵地として登載されている。付近には、南東に平安時代の遺跡である小曾根遺跡と中世城館址の三林城跡があり、北西方向には同じく平安時代の新田西遺跡と新田北遺跡が所在する。また、本遺跡の北側に隣接して上三林古墳（推定古墳）がある。

周辺はこれまで大きな開発は行われておらず、静かな田園風景が多く残っている。

本遺跡での調査はこれまでに例がない。

今回の調査地は、遺跡の東部分にあたる。

調査の概要

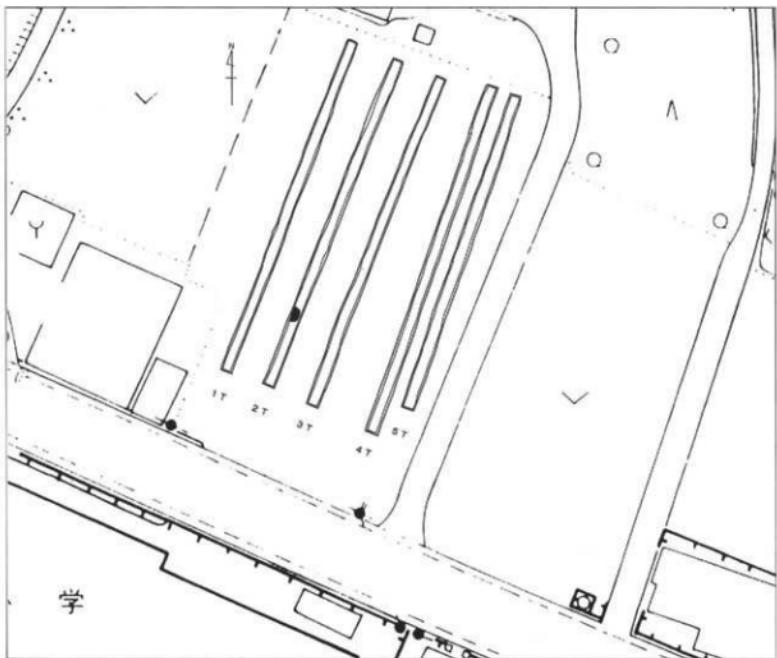
台遺跡（平19地点）の試掘・確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南北方向に5本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行い一つ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

現地表面からローム層までの深度は、1トレンチで約50～80cm、3トレンチで約60～70cm、5トレンチで約70～80cmであった。調査地はほぼ平坦な地形をしている。

今回の調査では、各トレンチから多数の掘り込みが見られたため覆土の除去を行ったが、不規則に走る溝や不定形な土坑であった。しかし、2トレンチ南側で時代不明の井戸址1基が見つかった。

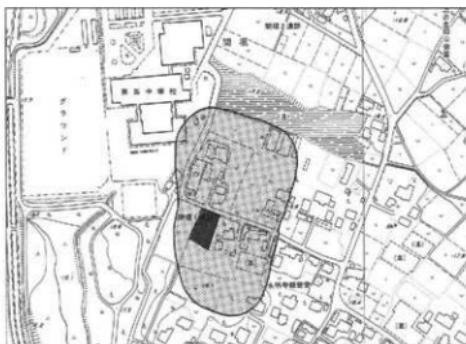
遺物は、調査地全体から近世陶磁器や石臼片等が大量に出土した。

今回の調査において、保存の対象となる遺構等の確認はできなかったことから、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第20図 トレンチ配置図 (1 : 500)

9. 間堀1遺跡



第21図 間堀1遺跡（1：5000）

所在 地

館林市上赤生田町字上ノ前3466-2

調査原因 個人住宅建設工事

調査期間

平成20年2月27日～3月11日

調査面積 827m²

遺跡周辺の環境

間堀1遺跡は、館林市街地の南東部、館林市立第四中学校の東側に隣接する、縄文時代の集落跡を包含する遺跡である。

本遺跡は、邑楽・館林台地南辺は東流する谷田川の細長い支谷が複雑に入り組んでおり、後に蛇沼を形成する北西に延びた谷とその北側の谷との合流点にある舌状台地上に所在する。

周辺の遺跡としては、北側に延びる谷の対岸に縄文・平安時代の間堀2遺跡、蛇沼を挟んだ対岸に縄文・奈良～平安時代の神明前遺跡、同じ舌状台地の南東方向には縄文・古墳～平安時代の上ノ前遺跡と谷向遺跡が広がっている。

遺跡周辺は中学校が建設された以外は大きな開発はされておらず、多くの田畠に囲まれた閑静な住宅地となっている。西側に広がる蛇沼湿原にはオニバスなどの貴重な植物が今でも残る。

本遺跡の調査は、昭和57年度に遺跡北西端部分で行われ、縄文時代前期の住居址1軒、縄文時代中期の住居址6軒、土坑2基などが見つかっている。

今回の調査地は、前回実施された場所から南東へ約70mほどの所にあり、遺跡の南側にあたる。

調査の概要

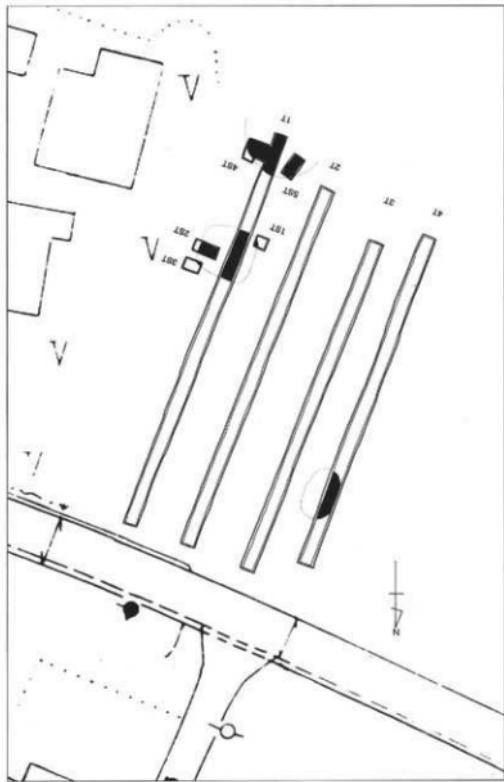
間堀1遺跡（平19地点）の試掘・確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南北方向に4本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

調査区域における現地表面からローム層までの深度は約20～50cmであった。また、調査区は南から北へ緩やかに傾斜しており、比高差は30cm程度であった。

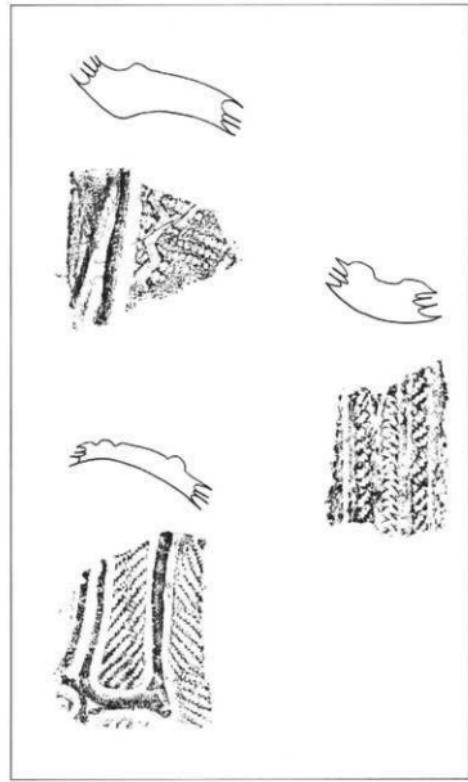
今回の調査で、1トレンチ南側でローム面に黒色土で覆われた掘り込みが見られたため、サブトレンチを両側に計3ヶ所設定し形状を調べた。その結果、南北4.3m、東西4.5m程の隅丸台形の住居址であることがわかった（1号住居址）。さらにその南で縄文土器の集中出土が見られたため、トレンチ両側にサブトレンチを設定し層位の確認をしつつ精査したところ、ローム層を切る土の変色が見られた。その広がりは1号住居址を上回り、南の調査区外にまで及んでいると思われる（2号住居址）。4トレンチ北側でも縄文土器の集中した出土が見られたことからトレンチ床面を精査したところ、同じく縄文時代の住居址であることが判明した（3号住居址）。2～3トレンチでは、整地された際に植栽されていたツツジの伐根により大きな擾乱を受けていたため、遺構の検出はできなかった。

遺物は、調査地全体から縄文時代中期の土器を中心に、石器等が多数出土した。特に住居址部分からは一括個体の出土が多く見られた。

今回の調査において、縄文時代中期の住居址が3軒確認されたことから、記録保存のための発掘調査も視野に入れて原因者側と協議していきたい。



第22回 トレンチ配置図（1：400）



第23圖 出土遺物實測圖 (1 : 2)

参考文献

- 戸沢充則編『縄文時代研究事典』 東京堂出版 1994
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬県遺跡大事典』上毛新聞社 1999
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬の遺跡 3 弥生時代』上毛新聞社 2004
- 館林市教育委員会『間堀遺跡発掘調査報告書』(館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集) 1982
- 館林市教育委員会『館林市の遺跡』(館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集) 1988

写真図版 1



1-1 町谷4遺跡 挖削



1-2 町谷4遺跡 調査風景



1-3 町谷4遺跡 3トレンチ完掘（北より）▲



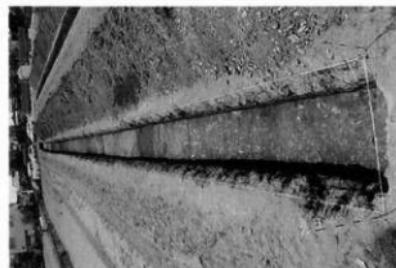
1-4 町谷4遺跡 3トレンチ内サブトレンチ



2-1 当郷本郷遺跡 調査地



2-2 当郷本郷遺跡 1トレンチ確認状況（北より）▲



2-3 当郷本郷遺跡 2トレンチ確認状況（北より）▲



2-4 当郷本郷遺跡 埋め戻し

写真図版2



3-1 嘴戸沼遺跡（A） 調査地



3-2 嘴戸沼遺跡（A） 1トレンチ完掘（南より）▲



3-3 嘴戸沼遺跡（A） 2トレンチ完掘（南より）▲



3-4 嘴戸沼遺跡（A） 1トレンチ石臼出土状況



4-1 子ノ神1遺跡 調査地



4-2 子ノ神1遺跡 調査風景



4-3 子ノ神1遺跡 1トレンチ完掘（南より）▲



4-4 子ノ神1遺跡 2トレンチ完掘（南より）

写真図版3



5-1 大道北遺跡 調査地



5-2 大道北遺跡 1トレンチ遺構確認（東より）▲



5-3 大道北遺跡 2トレンチ遺構確認（東より）▲



5-4 大道北遺跡 2トレンチ土坑完掘（南より）



6-1 噴戸沼遺跡（B）調査地



6-2 噴戸沼遺跡（B）1トレンチ遺構確認（南より）▲



6-3 噴戸沼遺跡（B）2トレンチ遺構確認（南より）▲



6-4 噴戸沼遺跡（B）2トレンチ遺構完掘（西より）▲

写真図版 4



7-1 小林遺跡 調査風景



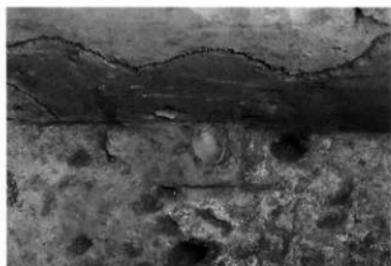
7-2 小林遺跡 1トレンチ遺構確認（東より）▲



7-3 小林遺跡 2トレンチ遺構確認（東より）▲



7-4 小林遺跡 3トレンチ遺構確認（東より）▲



7-5 小林遺跡 3トレンチ遺物出土状況（南より）



7-6 小林遺跡 出土遺物



8-1 台遺跡 調査地



8-2 台遺跡 2トレンチ完掘（北より）▲

写真図版5



8-3 台遺跡 3トレンチ完掘（北より）▲



8-4 台遺跡 2トレンチ井戸址完掘（東より）



9-1 間堀1遺跡 調査地



9-2 間堀1遺跡 1号住居址（西より）



9-3 間堀1遺跡 2号住居址（西より）



9-4 間堀1遺跡 3号住居址（西より）



9-5 間堀1遺跡 4サブトレンチ出土状況（西より）



9-6 間堀1遺跡 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たてばやしないいせき はっくつちょうき ほうこくしょ													
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書													
副書名	平成19年度各箇開発に伴う埋蔵文化財調査				卷次	_____								
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書				シリーズ番号	第44集								
編集者名	荒川博一		編集機関		館林市教育委員会									
編集機関所在地	〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号													
発行年月日	2008(平成20)年3月31日													
市町村コード	102075													
所収遺跡	所在地	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因							
町谷4遺跡	羽附町字町谷	131	361339	1393429	20070413～20070424	742m ²	その他開発 (資材置場)							
当郷本郷遺跡	当郷町字本郷	42	361432	1393354	20070516～20070528	1,526m ²	宅地造成							
咄戸沼遺跡 (平19A)	堀工町字咄戸沼	109	361317	1393224	20070921～20070928	266.09m ²	個人住宅							
子ノ神1遺跡	赤生田町字子神	124	361337	1393327	20070928～20071004	495m ²	個人住宅							
大道北遺跡	岡野町字大道北	13	361538	1393139	20071009～20071018	357.61m ²	個人住宅							
咄戸沼遺跡 (平19B)	堀工町字咄戸沼	109	361317	1393224	20071107～20071113	275.53m ²	個人住宅							
台遺跡	上三林町字台	89	361256	1392929	20080120～20080215	1,462m ²	店舗							
間堀1遺跡	上赤生田町字上ノ前	116	361322	1393252	20080227～20080311	827m ²	個人住宅							
遺跡名	種別	時代	主な構造		主な遺物	特記事項								
町谷4遺跡	包蔵地	平安時代	土坑1(時代不明)		縄文土器片	南側湧水								
当郷本郷遺跡	包蔵地	平安時代	なし		土師器片	擾乱								
咄戸沼遺跡 (平19A)	包蔵地	縄文・土師時代	土坑17(時代不明)、溝2(時代不明)		土器片、石臼片									
子ノ神1遺跡	包蔵地	平安時代	土坑9(時代不明)		土師器片	湧水								
大道北遺跡	包蔵地	古墳～平安時代	土坑5(近世)		土師器片、石器									
咄戸沼遺跡 (平19B)	包蔵地	縄文・土師時代	土坑2、溝1、井戸1(時代不明)		土師器片、陶磁器片									
小林遺跡	包蔵地	古墳・奈良～平安時代	土坑4(弥生時代1、時代不明3)		弥生土器片、土師器片									
台遺跡	包蔵地	平安時代	井戸1(時代不明)		陶磁器片、土師器片									
間堀1遺跡	集落跡	縄文時代	住居址3(縄文時代)		縄文土器、石器	一部擾乱								

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第44集

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成19年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

編集・発行 館林市教育委員会 文化振興課 文化財係（館林市文化会館内）

〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号 電話0276-74-4111

印 刷 朝日印刷工業株式会社

発行年月日 平成20年3月31日

© Tatebayashi City Board of Education 2008 Printed in Japan



文化財愛護シンボルマーク

<http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/>